

津軽の外国人英学教師ジョン・イングとその時代

鈴木 進

目 次

1. はじめに
 2. 名前の表記
 3. 東奥義塾とイング
 4. 津軽での働き
 - 1) 産 業
 - 2) 教 育
 - 3) キリスト教伝道
 5. ジョン・イング略年譜
- 注
参考書

1. は じ め に

「蘭学」とは単にオランダ語の学習、研究をさすのではない、と同様に「英学」という時には、英語を通して行われた英米文化の紹介、移入一切を意味し、英語学、英米文学は勿論、広く自然科学も思想も日常生活のことをも含ませる。

明治初年、主として語学教師として各地の英語学校に招かれた英米人の場合も、その地方の人々にとって、彼等の毎日の生活を見ることそのものが英米文化を知る機会であつたと言えよう。

米沢のイギリス人 Charles H. Dallas, 福井の William Griffis など、その中で札幌の William Clark と熊本の L.L. Janes はあまりにも有名である。

同様に本州の最北端、津軽の地にも一アメリカ人英語教師の手で、キリスト教会を中心とした英米文化が花ひらいた。

筆者はかつて東奥義塾に奉職し、そこで、比較的低温地方の産物であるリンゴに「印度リンゴ」なる品種があることに素朴な疑問をいだいていたが、その名前のいわれについて東奥義塾の古いアメリカ人英学教師の出身地に由来する説があるのに興味をもち、津軽時代の Ing とその周辺をまとめてみた。Ing の業績についてはすでに重久篤太郎氏「お雇い外国人」、⁽¹⁾ 桜庭一男氏「明治前期津軽リンゴ経済史」⁽²⁾ ギルバート・バスカム氏「宣教師ジョン・イング伝」⁽³⁾ のすぐれた研究があり、新しい資料も筆者は見つけることができなかったため、ここでは、これまでの資料を基に、津軽という地域と時代の特殊性との関連において英学教師ジョン・イン

グ像を描いてみた。尚本稿は日本英学史学会第9回大会にて口頭発表した原稿に加筆したものである。

2. 名前の表記

来日欧米人の名前の表記及び発音について疑問をもたれることが時にある。イングの場合も Inge ではないかとの疑いもある。

ちなみに、アメリカの劇作家に William Motter Inge [indʒ]、イギリスの神学者 William Ralph Inge [inj] がいるが、これらの二人の綴りは Inge でも発音が異なっている。

イングの場合は Ing[in] を裏づけるものとして明治11年1月に東奥義塾から当時の「明六雑誌」にならって「開文雑誌」が発行されその中になぞなぞがあつて曰く、「東奥義塾とかけて何と解く？」「現在分詞 present participle と解く、その心は Ing を要する」⁽⁴⁾とある。又、東奥義塾に現存する明治10年の山鹿旗之進の卒業証書には Jho (John の短縮形又は愛称)Ing と毛筆のサインがあり John Ing の綴りは正しいであろう。発音については「弘前公会記事」にジャン・イングと仮名で記されていた。

3. 東奥義塾とジョン・イング

John Ing が弘前に来たいきさつを述べる前に、廃藩置県前後の津軽藩校と東奥義塾について概観する必要がある。

明治2年、津軽藩校稽古館から藩命により慶応義塾に派遣され、その後鹿児島に留学中の菊池九郎が二年後に帰郷してみると、その間に稽古館は弘前漢英学校と変り、さらに明治5年8月の旧藩校廃止令により廃滅の危機に瀕していた。これを嘆き、新たに私立学校として建て直すべく、旧藩主承昭に援助を教授としては慶応出身吉川泰次郎らの協力を得て、政府に申請し明治5年11月17日文部省から開業許可が下り開校したのが東奥義塾である。

奥羽列藩同盟を脱退し、結果的には薩長に組したとていうものの津軽藩の青年達にも中央政府で活躍する余地はなかった。彼らに残された道は西洋文明、特に外国語を修得し国外に望みをかけることであった。こうした地域と時代の求めに応じ正則英語の教授として明治5年には Charles Henry Wolff. その後 Arthur Collins Macley を7年冬まで雇った。菊池は、Macley の後任の英学教師を得たいと、その頃横浜の James H. Ballagh について英学を学んでいた本多庸一⁽⁵⁾に相談したところたまたま Robert. S. Macley の家で中国伝道から帰米途中横浜に立寄ったアメリカ美以監督教会宣教師 John Ing 一家を見つけた。Ing 一家は生れたばかりの女兒を横浜で亡くし悲しみの中にあったが新たな希望を日本の北国にかけ、この招きに応じることを決心した。海路三週間かかって12月の雪の降る日、妻 Lucy、息子 Johnny それに一人の中国人の少年と共に弘前に着いた。Ing 35才の時であった。

John Ing は1840年(天保11年)8月22日、アメリカ、Indiana 州 Greencastle に生れ、南北戦争では連合軍騎兵少佐に任命された。退役後父 Stanford の後をついで牧師になるべく

Indiana 州アズベリー大学（現デポー大学）に学び1870年に中国伝道に渡ったのであった。

1874年（明治7年）12月から1878年（明治11年）3月帰国するまで津軽での3年4ヶ月間に、英学教師 John Ing がなした働きは単に語学教授に終ることなく津軽文化への大きな貢献であった。彼がもたらしたものを三つの分野に分けて考えるのが便利であろう。第一は産業面での貢献、第二は教育、第三はキリスト教の伝道のそれである。

4. 津軽での働き

1) 産 業

イングという名前によって連想されるものは青森リンゴであろう。「明治8年12月のクリスマスに、イング先生御宅に招かれ、同級生一同、紙包之果物、之れは林檎なり、と承り、大いに驚き申候、その当時、之地方の林檎と余りに大きく名之付け様、無之、西洋林檎と称へ候」。義塾の生徒の一人としてご馳走になった山鹿元次郎牧師がその時の感激を桜庭一郎氏宛⁽⁶⁾の手紙に見ることができる。又その一行の中に津軽リンゴの基礎をつくった佐藤勝三郎もいたといわれ、後年この話を聞いた賀川豊彦は「喰いたいリンゴを我慢して、庭に埋めた勝三郎、津軽半島救うたよ」と彼の業績を称えた。塾頭菊池九郎は試食した種子を翌年邸に蒔き変種実生したのが後年の印度種で Ing の出身地 Indiana 州の名をとったともいわれる。⁽⁷⁾

津軽地方に西洋リンゴが入ったのは、⁽⁸⁾ このクリスマスの出来事の数ヶ月前であった。つまり明治8年4月、時の内務省勸業寮から西洋種リンゴの苗木がブドウ、桜桃、アンズ、スグリなどと共に配布され、弘前の山野茂樹、菊池楯衛、菊池三郎等は苗木を前に、その栽培法を知らず困っていた所であった。たまたまその年のクリスマス・イブに英語教師 Ing の手によって、この苗木に結実するリンゴを示された訳であった。

この地方リンゴ栽培のパイオニア、山野、菊池等は旧津軽藩士であった。他の藩と同様に明治2年版籍奉還の時、京都に報告された士族の数は3,327人⁽⁹⁾を数え、これらの職を失った士族にいかにして生活をたてさせるか一大社会問題であった。そこで士族授産の一環として取り組んだのがリンゴ栽培であった。山野茂樹、菊池楯衛、楠美冬次郎、菊池三郎等の栽培法の改良、販路の拡張により、後年の青森リンゴをみることになる。

勸業寮によるリンゴ苗木の配布は他の府県にもなされたと思われるが、なぜ津軽地方が成功したのであろうか。Ing は熊本の Janes と同様、改良啓蒙思想の持主であり、Ing 自身農業の経験、知識が豊富であったので津軽にはうってつけの人物であった。イングの影響を受けたと思われるものに前述の佐藤勝三郎らの敬業社がある。明治18年、弘前北東6キロ、藤崎の地にイングに接したクリスチャン達のリンゴ園があり名付けてエデンの園と呼んだという。彼らはキリスト教信仰を支えとし、団結、協力しリンゴ産業と取組んだ。やがてメソジスト藤崎教会（明治20年）を結成することになる。

後述の米国留学生の一人、菊池軍之助は Ing による第一回受洗者14人のうちの一人であり、Greencastle では農業専攻であったという。

2) 教 育

Ing 本来の仕事、つまり青森県管下、第三大区、一小区弘前町東奥義塾英語教師としての Ing の姿である。

津軽藩は佐幕派で終始した訳ではなかったものの、本多庸一を評した山路愛山のことばを借りれば「維新の時に於ける津軽の位地と其苦心を知るものは、誰れか彼が得意ならざる境遇の人なるを疑うものあらんや」⁽¹⁰⁾ と。同様に英学をもって時代の逆境から起き上り立身出世したい、英学をもって西洋文明に追いつきたい没落士族の子弟達が Ing の弟子であった。

Ing の人柄は「資質忠厚にして義気に富み歴史を講じて、忠孝節義の談に至れば音声ふるえ眼に涙を浮べて談り、学生も嗚咽することしばしば」と、又弘前教会五十年略史には「風采立派な堂々たる軍人氣質であるが温厚な人の恭敬を受けるに値する人なり」とある。フロンティアスピリットと清純な清教徒精神を合せ持ち、豊富な知識の持ち主でもあった。生徒たちも新知識を渴望し、たち遅れた祖国を西洋諸国の水準に高め、国を救うの意気ごみであった。

かつての南北戦争の勇者と維新の動乱を経験し祖国の未来を思う士族出身の生徒達が教室に相対する時に自ずと真剣な学びの場となったことであろう。

Ing は英語、理化、数学、博物、史学を担当し、教授に当っては片言隻句悉く肺肝より迸り、自然科学は実地に就いて教えた。例えば岩木山の測量法を教えたり、路上に石魂をひろい鉱物を講義するという教授法であったという。⁽¹¹⁾

明治8年10月より14年3月まで在学した木村繁四郎氏の「明治初期に於ける私の塾生生活」という文章によると、当時義塾では学科本位で組を作っていて、広い部屋の中に英語、数学、漢文、歴史など各組に分れ自分の能力によって適当な組に入って勉強していた様である。テキストは学校備え付けで、地理、歴史、数学、理化、生理等は原書を用いた。⁽¹²⁾ 当時用いられたと思われる東奥義塾に現存する、テキスト、辞書類については山本博氏の研究によって知ることができる。⁽¹³⁾

ウェブスター大辞典 ウェブスター中辞典

ミッチェルの最新地図 コーネルの高校地理学

クアケンボス物理書 改正増補英和对訳袖珍辞書

英華字典 香港デーリプレス社

英国小史 ウィリアム・スミス著

米国政治必携 マンスフィールド著

英語教授法について知る術がないが、Ing は日本語が話せなかったらしく、講義はすべて英語でなされたものと思われる。日曜学校の英語クラスでは英語聖句の暗記を盛んにやった様子で、この方法は語学の最上の勉強法であると同時にキリスト教の信仰を強めるにも役立ったであろう。

Ing 在任中の出来事として明治9年7月15日、明治天皇東北巡幸の際、義塾学業ご親考記念写真が残っている。この時 Ing、本多、菊池の指導により生徒10名が英語スピーチ、英作文、

英語唱歌の学習デモンストレーションを行った。

10年6月、塾生中より優秀生5人がIngの斡旋により彼の母校Indiana州アズベリー大学に留学。出発の際の記念写真が東奥義塾の古いアルバムに残っている。後年の待従長伯爵珍田捨己、⁽¹⁴⁾ 外交官佐藤愛麿、その他那須泉、川村敬三の4人しか写っていないのは、菊池軍之助が西南の役に上京していたためと想像される。

当時は教育対象として重要視されなかった女子のために8年4月、小学科女子部が設けられたこともIng指導のもとのキリスト者たちの働きであろう。

3) キリスト教伝道

英語教師として招聘されたものの、中国伝道半ばにして妻の健康上の理由で中国を去ったIngであるからキリスト教伝道こそ彼の使命であったろう。ここに横浜で信仰に入った本多庸一とIngによる津軽伝道が始まった。

Ingは自宅を開放し日曜日午前中を英語聖書講義に当てた。午後は塾頭が学校講堂にて説教をする。市民もこれを聞くために義塾に来るようになった。横浜留学中の本多が義塾に招かれて、「余、もし往かば東奥全体の教育のために、一つは伝道のためにもならんと友人の勧めありて」⁽¹⁵⁾ 弘前に帰った。しかし予言者は自分の郷里では敬われないものである。本多は塾長として強制的に生徒を集め講堂にて耶蘇の説教するとは怪しからん。これでは子弟を義塾に托することは出来ぬとの非難も受けた。学生生徒の中には刃を以て脅かされこの地より追放される者も出た。息子が耶蘇の説教を聞きに行つたと知って寒中岩木川に連れて行き「祖先の位牌に泥をぬる不忠不義者、みそぎをしてくれる」との記事も見られる。しかしこの迫害の中に遂に14名の初穂⁽¹⁶⁾ が得られた。明治8年6月6日のことであつた。塾生たちの集団入信で熊本バンド、札幌バンドのそれよりも時期としては早いものであつた。⁽¹⁷⁾

津軽のキリスト教布教の下地はどんなであつたか。津軽藩のキリシタンについては、ここでは触れないが、本多庸一の場合、稽古館で漢訳旧新約聖書(1864年上海美華書院版)を佐藤称六⁽¹⁸⁾ に借り「元始時神創造天地」の一句に心を動かされたという。又弘前の名医北岡大淳にバベルの塔の話も聞いている。彼の教養は儒教であつたが陽明学も学びキリスト教の神の存在へはスムーズに転換できた⁽¹⁹⁾。「弘前教会五十年史」によると弘前にキリスト教が入つたのは明治5～6年頃、ウォルフ、マクレによるとある。しかしこの二人からは信者はおこらなかつた。

こうした新しい宗教の普及は津軽の市民の意識をどう変えたのであろうか。士族と平民の交わりはIngのミッションへの手紙に「斯やうにして旧来の階組的画線は取り除けられつつ之有候」⁽²⁰⁾ と報告がある。婦人の地位の向上は前述の女子教育にも見られるが、明治15年に建てられた函館遺愛女学校の最初の生徒たちはほとんど弘前の出身であつたということにも父兄の子女に対する態度がみられるのではないだろうか。教育の普及は婦人の風俗にも変化をもたらした。彼女達はお歯黒の習慣をやめ山田きよ子の如きは白歯の阿母さんと呼ばれたという。⁽²¹⁾

先の14名の受洗者達を核として明治8年10月には弘前基督公会(長老派)の誕生をみるが9年12月メソジスト弘前教会に派が変わつたのはIngの影響によるものである。爾来今日まで

200 名にも及ぶキリスト教伝道者を生んできた弘前という町はキリスト教界にも類をみないという。

文化の落差は確かに大きかったであろう。しかし一私雇米人英語教師が日本の地方小都市に、わずか3年4ヶ月という短い期間の滞在にもかかわらず上に述べたような大きな働きを彼をしてなさしめた、見えざる力にこそ栄光を帰すべきであろう。

その Ing も弘前を去る日が来た。「明治11年3月7日、多くの生徒たちは雪あるを物ともせず草鞋ばきにて送れども一里又一里往きてもどる者一人もあらざりき。ルーシー夫人は折々籠より出て『皆さん、帰りが遅くなるから』とか『今日は寒いからもうお帰り下さい』などと言えども尚袖を別つ事能わざりき」。²¹⁾ 有名なクラークの別れの場を思わせる。

1878年アメリカに帰った Ing はしばらくは伝道にたずさわったが、後農場を経営し1930年6月4日、79才の生涯をイリノイ州の小さな町で終えた。

5. ジョン・イング略年譜

年 号	イ ン グ 関 係 事 項	津 軽、 そ の 他
1796 (寛政8年)		津軽藩稽古館創建、
1792 (寛政4年)		この頃より異国船、北辺近海に出没す。
1807 (文化4年)		海外への関心高まる。
1840 (天保11年)	8月22日メソジスト監督教会牧師 スタンフォード・イングの長男として インディアナ州グリーンカッスルに生れる。	
1848 (嘉永元年)		本多徳蔵(庸一)弘前に生れる。
1854 (安政元年)		日米和親条約締結。
1855 (安政2年)		幕府に藩書調所設けらる。
1857 (安政4年)	一家ミズリー州へ移る。	
1858 (安政5年)		福沢諭吉、私塾を起す。
1859 (安政6年)		アメリカプロテスタント教会宣教師来日。
1860 (安政7年)		咸臨丸太平洋横断。
1861 (文化元年)	イング連合軍騎兵大尉に任命さる。 退役後アズベリ大学入学。	アメリカ南北戦争。(1861~1865) 佐々木元俊、稽古館にて蘭学教授。
1863 (文久3年)	同大学卒業。	
1868 (明治元年)		奥羽越列藩同盟。後、津軽藩は脱退。

1869 (明治2年)		稽古館に英学寮設けらる。 箱館戦争、藩籍奉還。 菊池九郎他2名、慶応義塾へ留学。 菊池は後、鹿児島に西洋人に英学を学ぶ。
1870 (明治3年)	インディアナ州長老派牧師ランサン・ハウレの娘ルシーと結婚。 メソジスト・セントルイス年会で、2人を支那宣教師として承認、出発。 中央支那チャンチングに到着。中国語、その土地の研究調査。	稽古館に英学寮設けられる。本多、英学修業のため横浜ブラウン塾へ。 青森蓮心寺に英学寮開かれ、永島貞次郎、吉川泰次郎、英学を講ず。
1871 (明治4年)		廃藩置県により弘前県となる。 英学修業生に藩の公費支給停止、ために本多帰郷。青森英学寮閉鎖。 弘前県を青森県に改める。 熊本洋学校設立。ジェンズ招かれる。
1872 (明治5年)	ポヤング湖畔ウチュに移る。	本多、再度横浜に來り、バラにより受洗。 弘前漢英学校開校。藩校廃止令により稽古館廃校。 私立東奥義塾開校。
1873 (明治6年)	中国人受洗者4名、求道者3名。	切支丹禁制高札撤廃。
1874 (明治7年)	ルシーの健康上の理由のため帰米。途中、横浜で本多に会う。 東奥義塾英語科主任として弘前に、赴任。	「明六雑誌」創刊。 本多、東奥義塾塾頭となる。
1875 (明治8年)	イングの家で14人、受洗。 クリスマスにリンゴを配る。	弘前基督公会設立。
1876 (明治9年)	菊池九郎、受洗。明治天皇、北国巡幸。 英語学習デモンストレーション。 弘前メソジスト教会成立。	花岡山「奉教趣意書」宣誓。 札幌農学校設立。クラーク来任。
1877 (明治10年)		西南戦争。 東奥義塾生、アスベリ大学留学。
1878 (明治11年)	イング帰国。	
1881 (明治14年)	ルシー 神経衰弱で死去。	

1882 (明治15年)	イング、セントルイス年会名簿より除籍を願い出る。 ペンシルバニア出身フィルシャ、ショネスと再婚し娘ラベニアをもうける。 スペイン・アメリカ戦争で長男ジョニー溺死。	
1885 (明治18年)		藤崎敬業社。
1896 (明治29年)		本多、クリーブランドメソジスト教会にイングを訪れる。
1902 (明治35年)	父と共にイリノイ州で農場を経営。	
1904 (明治37年)	父スタンフォード死。	
1918 (大正7年)	妻フィリカ死。	
1930 (昭和5年)	6月4日、イング死。 イリノイ州ベントン墓地に葬らる。 79才9ヶ月13日。	

(イング年譜は「東奥義塾95年史」中、キルバート、バスカム氏「ジョン・イング伝」による。)

(注)

- (1) 重久篤太郎「お雇い外国人・教育、宗教」(鹿島出版会)
- (2) 桜庭一男「明治初期津軽リング経済史」
- (3) 東奥義塾「東奥義塾創立95年史」
本稿の資料は主として以上(1)(2)(3)によっている。記して謝意を表します。
- (4) 「東奥義塾再興十年史」伊東重の傑作なりとある。
- (5) 津軽藩は洋学修業のため60余の優秀な藩士を先進各地に藩費をもって留学させた。
本多庸一は長州に行く筈であったが横浜に変更し明治三年からバラ・ブラウンのもとで英学を学んでいた。
- (6) 桜庭一男「リング経済史」p. 37
- (7) 青森県経済部「青森県リング史資料第七集」
- (8) 「日本に西洋リングが入ったのは文久年間(1861~1863)で福井藩主松平春嶽の江戸巢鴨別邸において」とある。小学館「国民百科辞典」
- (9) 桜庭一男「リング経済史」p. 13
- (10) 山路愛山「基督教評論」明治39年。
- (11) 「東奥義塾再興三十年史」p. 5
- (12) 「東奥義塾再興十年史」p.p. 26~28
- (13) 山本博「津軽の英学」弘前大学文化紀要第9号p. p. 139 - 140
- (14) 大修館「英語教育」1967年1月号、明治の英学者名簿一覧によると「珍田捨己、雙解英和大辞典、明治25年」とあるが筆者はその辞典を見てない。
- (15) 山鹿旗之進「菊池九郎先生小伝」p. 155
- (16) ジェーンズ、熊本洋学校生徒に授洗(明治9年6月5日。4月3日の説もあり。)メソジスト教

会宣教師ハリス札幌農学校生徒 6 人に授洗（明治11年 6 月 2 日）

- (17) 岡田哲蔵「本多庸一伝」 p . 28
- (18) 「近代日本とキリスト教」 p . 69隅谷発言など。
- (19) 「弘前教会五十年略史」 p .304 山鹿旗之進訳
- (20) 同書、 p .279高谷とく「婦人たちの面影」
- (21) 「弘前教会五十年略史」 p . 191

その他の参考書

- (1) 基督教学徒兄弟団発行「近代日本とキリスト教」－明治篇
- (2) 重久篤太郎「明治初期文化の先蹤としての基督教宣教師」同志社高商論叢第23号
- (3) 砂川萬里「日本の代表的キリスト者、本多庸一」東海大学出版会
- (4) 青山学院編「本多庸一」昭和43年
- (5) 武田清子編「日本プロテスタント人間形成論」明治図書
- (6) 宮崎道生「青森県の歴史」山川出版社
- (7) 福原麟太郎「日本の英学」新潮社版日本文化研究